

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03067

研究課題名(和文) 歴史資料としての「書」が今、語り出す

研究課題名(英文) Now it's time to read meanings of handwritings as a historical materials.

研究代表者

黒田 洋子 (Kuroda, Yoko)

奈良女子大学・大和・紀伊半島学研究所・協力研究員

研究者番号：70566322

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：奈良時代の「書」としては天平写経に代表されるような芸術的価値を有するものが研究の対象とされ、正倉院文書の中の実務官人が書いた書は世界に類例を見ない量にもかかわらず、今まで研究の対照とされてこなかった。しかし、「書」は芸術である前に情報伝達の役割を担う。単に言葉を載せて運ぶだけでなく、書自体が情報を含むものである。書の変遷を考えると、芸術的な視点のみからではなく、実用面における書の変遷を今こそ考えなければならない。本研究では、既存の書道史から脱却して実務の場で用いられた書の特徴を考察し、実用の書の歴史を歴史学の視点と方法論で考察する。まさに歴史資料としての情報を書から引き出すことを試みる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

正倉院文書の「王羲之習書」などの史料から、奈良時代の王羲之書法の受容は、律令文書行政を支えるためのものであり、実務官人が受容の担い手であったことを明らかにした。これによって芸術文化として享受されたとする従来の王羲之の捉え方に新知見を加えた。

第二に隋・唐に完成したと言われる「楷書体」は、太宗のもとで弘文館学士らによって王羲之書法をもとに統一が図られた書体であったこと、第三に隋唐以前においても、公権力のもとで儒学に基づき篆書学者によって書体の整理・統一が図られたことを明らかにした。これによって様式論的変遷から見た従来の書道史観を離れ、社会的要因との関連から書を考察する新視点を開いた。

研究成果の概要(英文)：In the Nara period, calligraphy of artistic value, such as the Tenpyo Shakyō (copying of a sutra), has been the research subject. In contrast, the vast amount of calligraphy written by practicing officials has not been the research subject until now. However, "calligraphy" is not only an art form, but it also plays the role of conveying information. It does not merely carry words, but the calligraphy itself contains information. When considering the transition of calligraphy, we must now consider the transition of calligraphy from a practical standpoint, not only from an artistic perspective. In this study, we depart from the existing history of calligraphy to consider the characteristics of calligraphy used in practical situations. We also examine the history of practical calligraphy from the perspective and methodology of historiography. We will attempt to extract information from calligraphy as a genuinely historical resource.

研究分野：日本古代史

キーワード：正倉院文書 実務官人の書 王羲之 楷書体 草書体 隷書体 書状 江式・蔡ヨウ

1. 研究開始当初の背景

唐代の書家、張懷瓘が「書は文章の働きを發揚するもの」（『書断』序）であると端的に語っているように、「書」は文字や言葉による伝達を助ける役割を持つものである。すなわち、書の働きを考えると、そこには言葉に情報が込められたのと同様、「書」にも筆記者の情報が込められている。墨筆史料を見る際、我々はそれをも情報として読み取らなければならない。

国語学や歴史学あるいは隣接する諸分野においては、今まで翻刻された史料を主たる研究対象として用いてきた。翻刻史料による研究は、文字や言葉や文章の意味を解明することを主たる研究手法とする。こうしたオーソドックスな研究環境に対して、近年めざましく史料のデジタル化とその公開が進み、従来一部の研究者しか目にするのでできなかった原本や古写本等の写真が容易に閲覧できるようになりつつある。

そのような中で、公開された画像資料において我々が注目しなければならないのは、単に翻刻の誤りや未収文字情報だけではない。刊本の活字からでは読み取ることのできなかった「書」に込められた情報を今こそ読み取らなければならない。特に資料のデジタル化が進み、その解読をAIが担うようになってきた状況において、捨象されかねない情報を一次史料から読み取るとは喫緊の課題である。

つまり歴史学を取り巻く研究状況として「書」を芸術として捉えるのとは別に、歴史学的手法で実用面での機能や変遷をきちんと捉えなければならない時に来ている。

2. 研究の目的

本研究は、律令官人らが実務の場で書いた書の特質を考察し、歴史学の視点と方法によって分析を行い、そこから歴史資料としての情報を引き出すことを目標とする。すなわち書体の変遷や成立に関して、従来の芸術史観を離れて政治・社会的契機との関連性を明らかにする。

考察の対象は、著名な書の作品ではなく、当時の実務官人によって日常業務の中で書かれた実用の書である。もとより歴史資料であるため、その内容や書式・用語などに関しては、歴史学による研究の蓄積がある。それらを踏まえて、従来の書道史では言及されなかった、新たな歴史情報を読み取ることが試みる。

申請者は前回までの科学研究において、正倉院文書の中の「書状」について、従来の古文書学的研究とは全く異なる方法、すなわち「書式」・「用語」・「書体」という三つの要素から分析を行った。書状の要素のうち「書式」と「書体」については、すでに漢代から深い対応関係があり、公文は楷書体で書き、書状は草書体で書くといった使い分けがあったことがわかった。こうした用途に応じた使い分けを奈良時代の実務官人も認識しており、正倉院文書においても公文と書状とでは書体を使い分けていることがわかった。このような楷書体と草書体がそれぞれに持つ本質的な性格に着目するところから研究を進める。

3. 研究の方法

正倉院文書の中の、実務官人が書いた書状を観察すると、草書体の受容という観点に立つことで、いくつかの問題点を指摘することができる。すなわち①草書体の受容・定着の痕跡は見られないものの、楷・行書体の中に王羲之「集字聖教序」の受容の痕跡があること、②一見稚拙にも見えることから「六朝風の古い書風」と言われる、隷書風の書の中に、意図的な省画の書体があるこ

と、③僧侶の書には楷書と草書の書き分ける意識が希薄であること、これは僧侶が官人と異なる過程を経て書を習得していることに起因すると見られること、そのため官人の書とは分けて分析する必要があること、などである。

本研究では、正倉院文書の書の観察から得られたこれら三つの問題点を指標として掲げ、日本の出土史料と中国・朝鮮の出土史料の二方向に対象を拡げて考察した。以下に具体的な作業工程を述べる。

平成 29 年度は、研究全体の基礎作業として、日本の出土史料と共に、近年発見された夥しい量の中国の出土史料の把握を行い、観察対象の収集に努め、次年度以降の準備作業を行った。これらの基礎作業を行うとともに、指標①に関連して奈良時代の王羲之書法の受容について考察を行った。

平成 30 年度は、まず指標①に関しては王羲之の書を文字ごとに検索できるよう、草書のテキストデータとして『右軍書記』を入力した。指標②の省画の書体に関連する作業として、中国出土簡牘類に見られる草書体の整理に着手した。前漢以降、隸書と並行して草書体の普及・定着が見られるが、その後の草書体形成を考察する上で重要と思われる、尹湾・馬圈湾・懸泉置・居延・額濟納から出土した漢簡、湖南省長沙東牌楼吳簡などの画像を取り込み、文字ごとに画像検索が可能となるようにデータを集積した。一方指標③僧侶の書体についても並行して作業を進め、『法華玄贊』巻六、『判批量論』『法華義疏』、『有法差別』などの画像を取り込んで文字ごとの画像検索が可能となるようにした。

さらに 30 年度には中国及び台湾に赴き、簡牘類を実際に肉眼で観察する機会を得た。長安では王羲之「集字聖教序」や「石台孝経」を直接観察し、文字の普及における石碑の重要性を確認するとともに、碑文のほかにも銀餅など同時代の文字資料の観察を行った。長沙では、東牌楼後漢・走馬楼前漢・三国吳簡をはじめ、里耶秦簡・虎溪山前漢簡・魚陽前漢簡など湖南省出土簡牘類の他、馬王堆前漢帛書・岳麓書院秦簡を観察し、文字の変遷に関する貴重な所見を得た。台湾では、奈良大学角谷常子教授の研究グループによる、中央研究院が所蔵する居延漢簡の調査に参加する機会を得て、書簡簡牘を中心に調査した。

令和元年度は、前年度までに行った中国を中心とする出土簡牘資料・金石文の観察に基づいて考察を行った。そこでは上記の①から③までの指標が有効であること、とくに①の王羲之書法は中国の実用書道の歴史において重要な役割を果たすものであり、かつ実用の書の変遷を考える上で鍵となることを確認した。考察をまとめるにあたっては、30 年度までに収集した画像や、所蔵機関に赴いての実物に対する徹底観察が、知見を得る上で大いに役立った。

さらに令和元年度には朝鮮半島の出土文字資料について、木簡・金石文などを中心に、蒐集と観察を行った。すなわち韓国から出土した木簡の他、高句麗『牟頭婁墓誌』・集安高句麗碑や百濟「梁官瓦」などの金石文、中でも近年研究が盛んな新出の墓誌などについては、できるだけ画像を蒐集し、書体の観察にあたった。百濟の扶余・公州出土の木簡は直接実見・考察する機会を得たが、二月に予定していた新羅木簡の実見・考察は急遽中止となり実現しなかった。なお、朝鮮半島の出土文字資料を観察するには、複雑に交錯した、高句麗・百濟・新羅・中国の当時の領土的背景を踏まえた上で考察する必要がある。そこで朝鮮半島関連の漢籍史料と『三国史記』『三国遺事』、金石文等について、盧泰敦『古代朝鮮三国統一戦争史』をもとに本学大学院の村上菜菜氏と精読し、関連する全史料を読了した。この作業はその後に行った、漢籍史料に見られる書

体関連史料の考察にも繋がり、書体の変遷を考える上での重要な手がかりを得ることになった。

令和元年度の後半には中国・望野博物館所蔵の吉備真備が書いた墓誌が公表され、法政大学で拓本を実見する機会を得た。墓誌に見られる吉備真備の書体は、本研究にとっても非常に重要な要素を含んでおり、今後の課題と考えている。

さらに他の作業としては、王羲之書法の重要性を再認識したことから、『王羲之全書翰』の積文の入力に着手し、前年度までに作業を終了している『右軍書記』と併せて、王羲之書簡に見える用語検索の充実を図ることにした。

令和2年度の整理作業としては、『王羲之書翰』の入力を完了し、それによりすでに終了している『右軍書記』と合わせて王羲之の書簡にみえる用語検索が可能となった。

その他の史料蒐集・整理の作業は令和元年度までにほぼ終了しているので、令和2年度・3年度はそれらをもとに考察した成果をまとめることに従事した。

以上のように、本研究においては、書体の画像と実物を徹底観察することに多くの時間を費やした。それに基づいて漢籍史料に基づいて結論を導き出した。

また令和2年度も、全年度に引き続きパンデミックの影響で、予定していた中国と韓国への調査が実施不可能となった。そのため研究対象を一部国内に振り替えて、平安時代の書の習得状況の把握を試みた。

4. 研究成果

成果としてはまず①の指標に関連して、奈良時代の王羲之書法の受容について考察を行った。

唐における王羲之の流行を受けて、奈良時代の貴族の間において王羲之は憧憬的であったと言われる。これを検証するべく、まずはその根拠とされる『万葉集』の中の「てし」の訓について考察したほか、「憧憬的」の証拠としてしばしば紹介される、写経所官人が書き残した「王羲之習書」の考察を試みた。すなわち「習書」の中に見られる用語の分析、および内藤乾吉氏が類似を指摘された王羲之『十七帖』との比較を行った上で、「習書」の中の楷・行・草、それぞれの書体の習得状況について分析を試みた。さらに前の科学研究で得られた、実務官人らの書の受容状況の考察結果と併せて、奈良時代における王羲之受容の諸段階を具体的に明らかにした。すなわち書の技術の習得に先立って、「蘭亭序」に示される書の観念が流入し、技術の習得を支えたこと、その後、楷、行、草と段階を踏んで受容されたことを明らかにした。さらに七世紀以前の古い書法から王羲之の書法へと、皇室における選択的転換が見られることなどを指摘した。以上の考察結果を、論稿「正倉院文書の中の「王羲之習書」について」としてまとめた。

本研究においては草書に着眼して研究を行ってきたが、草書と表裏の関係にあるのが隷書すなわち正書や真書と呼ばれる正式の書体である。草書の問題を考察するうちに、隷書や楷書の重要性や性格が具体的に明らかになってきた。そこでその特質を見極めておく必要が生じた。

書道史においては古文や篆書といった古い書体を除くと、書体は隷書から行書や草書を介して楷書が成立してくると説明される。ところが後漢末から三国時代にかけての早い段階から楷書に近い書体が現れることが、出土簡牘によって知られる。一方書論などの漢籍史料に「楷書」の語が見られる。これらのことから書道史では楷書は後漢末ごろから出現し、隋・唐にいたって完成した、と説明されるようになった。これに対し本研究では史料に見られる「楷書」あるいは「楷」の語を整理・考察し、それらが隷書のあとに成立する「楷書体」を指す語ではないこと、隋・唐に完成したと言われる「楷書体」はそれまでに徐々に形成された王羲之書法をもとに、公権力

によって整備・統一が図られた書体であったことを明らかにした。以上の考察は論考「楷書体について」としてまとめた。

さらに隋唐以前の楷書体が成立する以前、後漢から北魏にかけての隸書体が、社会の中でどのように認識されていたかを考察した。書道の世界で、正書の祖とされるのが鍾繇である。この鍾繇に関連づけられ、さらに遡っていささか神格化される人物が後漢・蔡邕である。実際には蔡邕は政治の中核におり、また古文学派の学者として著名な人物である。この蔡邕が北魏・江式の論書表の中でどのように位置づけられているかを手がかりにして、以下の点を明らかにした。

江式の論書表によると、北魏に至るまで公権力のもとで何度か文字の整理・統一が試みられた状況が窺われる。それらはいずれも儒学の手法に基づいており、しかも篆書学者に担われていた。それはすなわち文字が儒学と篆書によって裏付けられたものであったことを示すものである。そして文字は、実務官人が担う文書行政が契機となり、それが巨大な原動力となって普及・拡大したことを指摘した。さらに文字は従来言われているような、単に早書きが形態変化の契機となってそれを繰り返したのではなく、伝達手段としての合理化の希求が、文字の形態変化の契機であったことなどをまとめた。以上の考察は論考「楷書体前史 ―楷書体以前の隸書と隸書体から楷書体へ向かう形態変化の契機―」としてまとめた。

以上、王羲之書法を受容や、楷書体に関して得られた成果は、従来の書道史の見解とはまったく異なるものである。このような知見は、実務官人が書いた出土木簡や簡牘を研究対象とする日本古代史や東アジアの文字史において、文字の受容・普及・定着を考える上で今後重要な意義を有するものと思われる。あるいは国語学の分野においては、平仮名の成立を考察する際、草書体の受容と普及を抜きにしては考えられない。本研究で示した王羲之書法が段階的に定着したという具体的な様相が、解明の一つの鍵となると考えられる。

ところで令和 2 年度はパンデミックの影響で予定していた中国と韓国への調査に出られなかった。そのため研究対象を一部国内に振り替えて、平安時代の書の習得状況の把握に努めた。本学大学院生小菅真奈氏の協力を得て『源氏物語』等の文学作品に見える関連史料の悉皆調査と整理にあたった。その結果小菅氏が論考「平安中期における書に関することばの歴史的考察 ―『源氏物語』を中心に―」をまとめた(「古代文化」投稿中)。そこでは『源氏物語』に見られる書に関連する用語を整理し、それ以前に成立した『うつほ物語』と比較することで、書を表現することばが『源氏物語』で格段に多様化するという興味深い事実を導き出し、日本古代における書の習得状況を、従来に見られない手法で明らかにした。

本研究の研究成果は、『正倉院文書の一研究―公文と書状―』(独立行政法人日本学術振興会・令和三(二〇二一)年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(研究成果公開促進費「学術図書」(課題番号:21HP5065))に一部収録した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 黒田洋子	4. 巻 第150号
2. 論文標題 「新しい歴史認識をめざして 廬泰敦著『古代朝鮮三国統一史を読む』」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『弘前大学國史研究』	6. 最初と最後の頁 58頁～65頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 黒田 洋子	4. 巻 20190216
2. 論文標題 お願いの手紙の書き方は？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 朝日新聞全国版(土曜版Be)「木簡の古都学」41	6. 最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 黒田 洋子	4. 巻 2-1
2. 論文標題 「啓」・書状の由来と性格（学位論文第二部第一章）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 （お茶の水女子大学学位論文題目）「正倉院文書の一研究」	6. 最初と最後の頁 164-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 黒田 洋子	4. 巻 10号
2. 論文標題 正倉院文書の中の「王羲之習書」について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『古代学』	6. 最初と最後の頁 1,14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 黒田 洋子	4. 巻 39号
2. 論文標題 楷書体前史 楷書体以前の隷書と隷書体から楷書体へ向かう形態変化の契機ー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈良史学	6. 最初と最後の頁 1, 24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 黒田 洋子
2. 発表標題 正倉院文書の一研究
3. 学会等名 お茶の水女子大学学位論文公開発表会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 古瀬奈津子編(黒田洋子執筆分)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 522頁(うち188頁~211頁)
3. 書名 『古代日本の政治と制度 律令制・史料・儀式』(論文「楷書体について」)	

1. 著者名 奈良文化財研究所編(黒田洋子執筆分)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 161頁(うち124頁~126頁)
3. 書名 木簡ー古代からの便りー(「お願いの手紙の書き方 下級役人の教養 -」)	

1. 著者名 黒田 洋子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 480
3. 書名 正倉院文書の一研究 公文と書状一	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------